新たな発見に高まる期待

列石の石を運んだ道の跡か ◇ 伊勢堂岱遺跡第15次調査

現在第15次調査が行われている国指定史跡・伊勢堂岱遺跡では、同遺跡を象徴する遺物・環状列石の石を運んだ道の跡ではないかと推測されている遺構が新たに見つかり、石がどのように運ばれたかを知る鍵になるのではないかと期待されています。

環状列石に向かって真っ直ぐに伸びる帯状の硬化面発見

伊勢堂岱遺跡は、秋田内陸線小ヶ田駅付近の台地に位置する、縄文時代後期前半（今から約４０００年前）の遺跡。４つの環状列石が発見されるなど学術的価値が高いことから、平成13年1月、国の史跡に指定されました。また、小牧野遺跡（青森）、大湯ストーンサークル（鹿角市）など北東北及び北海道の環状列石のある遺跡と合同で世界遺産暫定リスト登録を目指し、昨年申請を行っています。

今年度の第15次調査から調査主体を台地の東側に移し、環状列石周辺の3地点で調査が行われています。

環状列石Ａ北側の４千年前の地層では、列石Ａから続く張り出し部分を確認したほか、帯状に伸びる２条の硬化面が見つかりました。

さらに調べると、▽硬化面は周囲の土よりも明らかに硬く、性質が異なる▽帯は約２ｍ間隔に平行に走り、対になるものと考えられる▽環状列石Ａに向かって真っ直ぐ伸びているといったことなどがわかりました。

▲環状列石Ａ北側から発見された２条の硬化面。列石の石を運んだ道の跡ではないかと推測されています

環状列石造営の謎を解く手がかりになるか

これまでの調査では、石などを積んだソリ状の運搬具を繰り返し引きずった、いわゆる縄文時代の「道路遺構」ではないかと推測されています。縄文時代の道は近年、三内丸山遺跡などでも発見されています。

環状列石に使われている石は、小猿部川などから運んできたとされるものの、どのような運搬方法で遺跡のある台地に運んだかなどは謎とされていることから、この発見が謎を解く手がかりになるのではないかと期待されています。

遺跡の世界遺産暫定リスト入りは今年の秋結果判明

遺跡は、考古学や民俗学、植物学などの専門家で構成される「伊勢堂岱遺跡調査検討委員会（委員長・小林達雄國學院大学教授）」の指導と助言を受けながら調査・発掘にあたっています。

7月4日には今年度の第1回検討委員会が開かれ、平成20年度の事業計画などについて各委員が専門的見地から指導と助言を行いました。

この中で、調査中の硬化面について委員からは、「今年の大きな発見。硬化面が伸びる方向を定めてから末端まで調査範囲を広げて」「表面だけでなく断面についても観察を」などと提言がありました。

また、岩石学が専門の委員からは、今年の冬、縄文人の世界観などを知る手がかりとするため、遺跡北側の眺望を妨げている杉を伐採したことに触れて、「伐採したことで田代岳もよく見えるようになったようだが、田代岳の麓を流れる岩瀬川などには伊勢堂岱の列石の石と成分が近い石があることがことがわかった。関連性を調べる参考にされては」と情報が寄せられました。

なお、遺跡の世界遺産暫定リスト入りについては、今年の秋に結果が出ることになっています。

▲今年度の第１５次調査について指導と助言を行った伊勢堂岱遺跡調査検討委員会（７月４日）

胡桃館遺跡

地中レーダーに建物？の影

―― 奈良文化財研究所　遺物の範囲特定で調査実施 ――

約１１００年前の建物跡などが出土した胡桃館遺跡の地中レーダーによる建物跡の詳細分布調査が7月上旬実施され、現在その結果について分析が進められています。

＊　＊

胡桃館遺跡は、西暦９１５年の十和田湖火山の噴火によって発生したシラス洪水で埋没したといわれている平安時代の遺跡。昭和36年に鷹巣中学校野球場の整地作業中に須恵器杯や土師器鉢が出土したことから、その後、昭和40年代前半までに国と県による調査が行われ、建物４棟と柵列が2列、掘立柱列のほか、木簡（文字が書かれた木札）などが見つかっています。

1千年以上前の建築材が当時のまま出土した例は奈良・京都の神社仏閣を除いてはほとんどなく、きわめて貴重とされています。

今回の調査は、建物跡がどこまで埋まっているかその範囲を特定するため、平成20・21年度の2カ年で調査を行うことにしたものです。

遺跡はシラス洪水の土石流で埋まっており、地表から３ｍ下に存在することから、従来の発掘調査では困難。そのため市教委では近年の考古学で大きな成果を残している地中レーダー探査が有効と考え、この調査方法で実績のある奈良文化財研究所に委託しました。

調査を行ったのは、ほぼ野球場の外野部分にあたる範囲。炎天下、レーダーを50㎝おきに何度も往復させ、その反応を電子的に記録しました。

現在、調査結果を分析中ですが、建物跡と推測される反応があったことがわかっています。

レーダー探査は、今年の秋、野球場北側の田んぼについても実施されることになっています。

▲胡桃館遺跡の遺物の詳細分布調査のため地中レーダー探査が実施された鷹巣中学校野球場

伝統の「全校着付け大会」が復活

―― 米内沢高校～日本の伝統文化を体験 ――

県立米内沢高校（佐々木潤子校長、生徒数１２６人）の伝統行事としてかつて行われていた全校着付け大会が6月27日、15年ぶりに復活しました。

米内沢高校の着付け大会は、昭和23年に家庭科が設立されたことをきっかけに最初は家庭クラブの行事として始まりました。

しかし、昭和59年に家政科が廃止され、また着物を持っている生徒が少なくなったことなどから平成5年に行われた第33回大会を最後に自然消滅するかたちとなりました。

大会の復活が決まってからは、男女生徒が専門の講師から指導を受けながら、練習に励みました。

当日は男子が3チーム、女子9チームが出場。モデル1名と着付け2名の3人1組で、制限時間を15分間とし、着付けに関する7項目（襟元、裾、おはしょり、背縫い等）を審査項目に、正しくきれいに着付けられるかを競いました。

生徒たちは、練習で学んだ手順を確認しながら、おはしょりの整え方や帯の結び方などを気をつけて、モデル役の生徒に着物を着せていました。

▲15年ぶりに復活した米内沢高校の全校着付け大会（写真は6月29日の学校祭での発表）。佐々木校長は大会で「着物の良さやしぐさなどを学び日本独特の文化にふれてほしい」と話していました